

子育ては永遠のテーマ

小泉吉永

子を思ふ親のこゝろは人の子の おやとなりてぞ思ひしりにき 季鷹

子育ての秘訣を教えた往来物『養育往来』の口絵にこんな和歌が記されている。挿絵は、父親が子どもに何かを語りかけているシーンである。「子を持てば七十五度泣く」「子を生みや苦を生む」という子育ての大変さに直面すれば、誰もが「這えば立て立てば歩めの親心」や「子を持って知る親の恩」を実感する。子育ては一筋縄ではないだけに、「人の親の心は闇にあらねども 子を思ふ道に惑ひぬるかな」（藤原兼輔）というのも、古今東西を問わぬ親の心情であろう。

「親子」「父子」「母子」という言葉を『広辞苑』で調べてみると、①「親子」を含む項目は一二件、②「父子」は二件で、逆に③「母子」は一件と多く（そのほとんどが「母子手帳」「母子家庭」「母子年金」など近代の用語）、現代では「父子」という言葉は「母子」に比べて影が薄い。一方、江戸時代はどうであろうか。一つの目安として江戸時代の書名を『国書総目録』等で拾ってみると、①「親子」を含む書名は一三点、②「父子」は九点、③「母子」は四点であり、江戸時代の書名には「父子」の方が「母子」よりも頻繁に使われている。江戸時代の子育て書にも『父子訓』や『父兄訓』はあるが、『母子訓』というのはいないことがない。

このうち林子平の『父兄訓』には「女性たる者は胎教を知らなくてはならないが、その胎教を女子に教えるのは父兄の役割である」と説かれている。彼によれば、父親たる者は妊娠中から子育てに関わり、細心の注意を払わなければならないのである。このように、江戸時代の父親は子育てに無関心であることが許されなかった。なぜなら、子どもを一人前に育て、立派な跡取りにし、家を存続させることは父親の重大な責務だったからである。

江戸時代には数多くの子育て書が登場し、様々な育児論が展開した。従来、この方面の文献では平凡社東洋文庫の『子育ての書』が最も重宝だったが、原本を正しく理解するには翻刻上の限界もあり、また、同書に未収録の文献も多数存在することから、これらを順次影印に付していくこととした。その第一弾として五〇余点の子育て書を世に送り出す次第である。本集成が多くの研究者に活用され、あるいは一般向けに敷衍され、現代の子育てを見直すヒントになれば本望である。これから、次々と資料を掘り起こし、充実した集成にしていきたい。

（法政大学講師・往来物研究家）